

苦小牧市医師会

医師

阿部 守邦

鑑別診断

「鑑別診断」とは、見慣れない字句と思いますが、医師は診断の思考過程で常に行っていることなのです。

人類の間で一番頻繁にかかる急性の病気は「かぜ」もしくは「かぜ症候群」とされています。かぜは、インフルエンザとは別で、大部分はかぜ起因ウイルス（型別で二百種以上あるため、感染を繰り返す）が鼻腔（びくう）、

症状の強弱の推移をまとめる

咽頭（いんとつ）、喉頭に感染して起きる病気で、気管支の範囲などまで広がることもありま

す。ほぼ一週間内に治まりますが、黄色の痰（たん）と分泌物が出たり鼻腔、咽頭に見られるときは細菌の感染を想定し、併発症または別の疾患（化膿性へんとう炎、気管支肺炎その他）として扱われます。

「かぜは万病のもと」とは、かぜが重い病気に進む場合と、さまざまな病気もはじめはかぜと思われる症状で見過ごされるから注意するようにと解釈されます。つまり、熱があればかぜ、そのほか頭痛や頭痛、咳（せき）や痰（たん）、さらに下痢や腹痛など、なにか一つあればかぜと判断する傾向の人は実に多いのです。

かぜを例にとりましたが、すべての疾患について鑑別診断は欠かせないこととなります。

いま、医療にかかわる記事もはらんしていると思われるかもしれません。病気の説明がなされている文面もよく見かけますが、簡略化して読みやすく表現されている、また専門用語を交えて詳しく書かれていても、一般の読者にどの程度理解をされ、関心

をもたれたかは、実のところ気がかりなことです。

解説などから、この病気だと決め込んでいる人の中には、それとは別の疾患である場合にあらわに疑心や不満を見せることがあります。従って鑑別できる知識・経験のないままの自己診断は不安が募り混乱することになりかねません。

自覚症の経過や聴き足りないことがらを補足し整理する問診や視診・聴打診・触診で得た検査結果を参考に類似疾患を鑑別して、初めて確定診断が得られます。

受診される前に病気を調べるのも結構ですが、症状を自覚した日・時を順序よく、さらに症状の強弱の推移をまとめられることが肝要と思います。

お問合せは、苦小牧市医師会

電話 33-47200